クリステヴァ、
『女の時間』を読む

浅井美智子

「子どもの時間」を呼び戻すことが、他者と時を共にしようとする時に、相手が大人であるような気がしてならな

注1 仁科弥生著「エリクソンと幼児教育」一九八
一年六月号より一九八三年十月号まで。幼児の教
育に掲載

穂子編訳）は、一九七四年から八四年までの「女の
時間」を含む子のインタビューと論稿から編まれて
いる。勿論、クリステヴァのすべての論稿を収録し

特集〈時間〉
特集〈時間〉

「母の言葉に従え、彼女を導入した概念である。彼女の言葉に従え、母親が母と幼児の融合状態（ラカーンの鏡像段階）を絶対視してきた「AはBである」という自己同一の主体概念に対して、「AはBではない」という否定的な概念が語り出される。言語の中心的テーマは、母と幼児の分離していく過程と、それに対する抵抗を示す抵抗概念を示す。「女性解放」という視点から読むこともできる。「母の言葉に従え、彼女を導入した概念である。彼女の言葉に従え、母親が母と幼児の融合状態（ラカーンの鏡像段階）を絶対視してきた「AはBである」という自己同一の主体概念に対して、「AはBではない」という否定的な概念が語り出される。言語の中心的テーマは、母と幼児の分離していく過程と、それに対する抵抗を示す抵抗概念を示す。」
特集「時間」

では、この主体はどのように西欧社会を変革し、欧を歴史的時間に位置づけられた社会とみなす。歴史的時間とは、はじめと終わり、目的や企てなど、要するに直線的かつ均質に配置された時間である。そして、この時間を支える主体を「男の主体」とするのである。他方、女の主観性における時間には、「男の時間」だけに支配されていない。周期的時間と「巨大な時間」が存在する。すなわち、前者は月経週期や妊娠期間などの反復性・永遠性を本質とする時間であり、後者はすべてを飲み込む神秘的な時間というより空間を描くことができる。これが一九六八年五月に一九六六年五月五月を通過した第二世代のフェミニズムである。彼女たちは女性解放の戦略として「母性的なもの」と「女性的なもの」を生けることを試みる。簡略化をおそれずに、それは「女の個性の主張、男女の差異の強調である。

フェミニズム第一世代は、「女性が男の時間に自由」を求めるよう、波ヴァラに代表されるクリスティヴァは、波ヴァラから一九七一年に一九六六年五月に、隠しの性のアイデンティティを問題とする。彼女たちの時間は、「父の娘」ということになる。しかし、「男の時間」に自己同一化できない「女の時間」に登場する。これが一九六八年五月五月に一九六六年五月五月を通過した第二世代のフェミニズムである。彼女たちは女性解放の戦略として「母性的なもの」と「女性的なもの」を生けることを試みる。簡略化をおそれずに、それは「女の個性の主張、男女の差異の強調である。

このことから、日本の女性解放の視点からみれば、今のところクリスティヴァ理論の借用は困難といわざるをえないと考える。なぜなら、男（父）
特集〈時間〉

誕生会の一年間

山口 陽子

この三月までの一年間は一歳児クラス十五名を担当していました。いちばん小さい二月生まれの子は

一歳一か月から二歳一か月までの一年間。四月生まれの大きい子は一歳十一か月から二歳十一か月の一

栄 chronological

されると第三世代が太古の母なる「巨大な時間」を特化することなく、それと第一世代が同化しようとした「直接時間」の両者が引き受けることができるならば、新たな女だけでも男の解放の展望も開ける可能性がある。今後のクリステュシアの理論展開に注目したい。

（聖徳学園短期大学非常勤講師）